

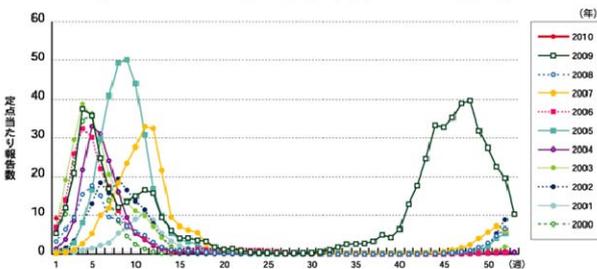


あけましておめでとうございます。本年も、院内感染対策と職業感染予防の推進への御協力をよろしくお願いいたします。

◎インフルエンザの流行状況◎

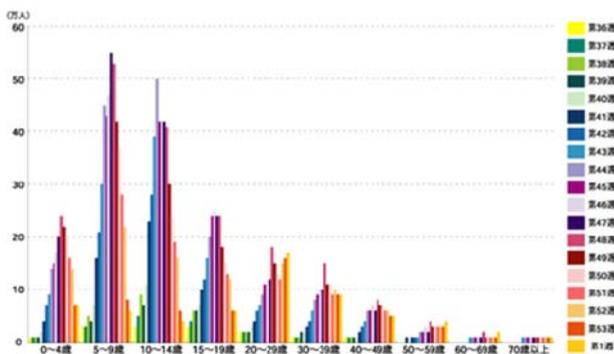
さて、今年もインフルエンザについて、現在の流行状況をお伝えいたします、ご存じのように、新型インフルエンザの発生数が昨年末から減少傾向に転じ、現在ピーク時の5分の1程度になりました(図1)。全国的には、沖縄県が再び増加に転じていますが、東京、大阪などの都市部は順調に減少傾向が続いています。また、現在分離されるウイルスは依然としてほとんど新型インフルエンザウイルスで、季節性インフルエンザのウイルスはほとんど分離されていません。

図1. インフルエンザの年別・週別発生状況(2000~2010年第1週)



この間およそ2000万人の国民が感染し、中でも5歳から14歳までの小児がそのうち半数を占めており、この年齢の子供たちの80%が罹患したことになります。現在ほとんどすべての年齢層で減少傾向ですが、20歳代で、やや増加がみられ、有意とはいえないものの50歳代以上でも2010年第1週に増加がみられています(図2)。

図2-インフルエンザ推計受診患者数(暫定値)の年齢群別推移(2009年第36週~2010年第1週)



以上の状況から、今後新型インフルエンザの第2波の流行があるとしても、流行を広げやすい小児のほとんどがすでに罹患しているため、未だ感染していない小児の残りと、20歳代の若い人に感染が広がるこれまでより小さな流行になることが

予測されます。

◎重症化、死亡症例の頻度◎

入院患者数は、人口1万人当たり1.24であり、年齢層別では、罹患者の割合は少ないものの、やはり、高齢者の入院率が高く、重症化しやすい傾向がみられています。

一方、インフルエンザ感染者の致死率は、0.001%

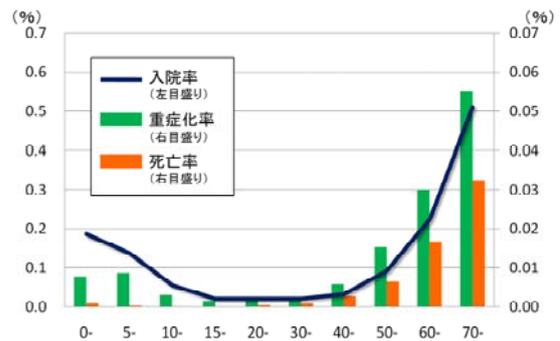


図3 年齢階級別入院率、重症化率及び死亡率(推定受診者100人当たり)

2009年8月3日から12月13日の報告まで/厚生労働省

未満であり、70歳以上の高齢者では0.03%と、平均よりも30倍高い死亡率になります。しかし、それでも季節性インフルエンザで推定されている平均0.1%よりもさらに低い値です。これは、日本においては、医療機関への受診が高率で、早期の抗ウイルス薬の投与が有効であった可能性が示唆されます。

いずれにしても、高齢者では重症化率、死亡率が平均より30倍以上高くなりますので、基礎疾患のある高齢者の方には今後もワクチンの接種が勧められます。

◎ワクチン接種の状況◎

ワクチン接種は現在まで、推計2000万人に行われ、副反応報告が0.01%、重篤な副反応が0.002%、接種後の死亡者が114人みられています。医療機関から「関連あり」とされた死亡症例は報告されていません。

現在大阪府のワクチン接種対象者は、基礎疾患のない健常者まで拡大されています。そこで、当院でも2月まで、曜日を決めて現在当院通院中の患者さんに対して、外来棟3階のワクチンブースで接種を継続いたします。予約も可能ですし、接種を希望される患者さんは予約なしでも接種致しますので、その旨御希望の患者さんには外来、入院主治医の先生方、外来の看護師さんから説明をお願いいたします。

職員への接種も大阪府の方針に従いながら、枠を広げて実施いたしておりますので、対象者の皆さんには漸次御連絡を差し上げる予定です。